教 会 月 報

No.529 （2023 年 1 月 29 日）
【２０２３年２月号】
日本キリスト教団埼玉和光教会
〒351-0114　和光市本町 15-50

神の憐れみによって

岩河敏宏

テトスの手紙 3 章 4 節～5 節

4 しかし、わたしたちの救い主である神の慈しみと、人間に対する愛とが現れたときに、5 神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、御自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました。この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗いを通して実現したのです。

私たちが他者から受ける評価は、自身が成した言動の結果に比例していることが大半です。なので、他者（家族/学校/会社）から良い評価を受けるためには、努力して相応の成果を獲得する必要があり、これが現実社会での一般的な評価の在り方です。ただ、この評価の在り方には、大きな問題が残ります。私たちは万能ではないので、それぞれに得手不得手があって、個人が精一杯の努力をしたからといって克服できるとは限りません。まして身体の個体差などは、努力の範疇ではありません。イエスの時代は、身体に関する決定的な差は神に対する罪の結果という評価がされていて、ヨハネ福音書９章２節にその痕跡として『**弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」**』とあります。自身の努力では回復不可能なのは、神に対して本人か直系の家族が何か罪を犯した結果だという解釈です。しかし、イエスは『**神の業がこの人に現れるためである。**』(3 節)と、それに異議を唱えます。冒頭の聖句も、このイエスと同じ視点です。

この手紙の著者も、神の救いを記した後に、「**この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗いを通して実現したのです**」の句が続き、神の救いが聖霊（神の霊の働き）によってもたらされ、新しい出発が可能になったと告げています。ここから分かることは、神の救いが全てに先行して在り、私たちの行いはそれに対する応答だということです。だから、私たちの行動の是非により、神の救いの有無が決まるのではないのです。もし、私たちの行いが基準となるなら、イエスの十字架の死を無駄にしてしまいます（参考；ローマ書３章21節～26節）。そうではなく、“**神の憐れみによって**”日々が支えられているのです。イエスは、『**わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない**』(中略)**わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。**」(**マタイ福音書 9 章 13 節**)とあり、この視点が聖書全体を覆っています。人の評価は行いの是非ではなく、神が一人ひとりに語る言葉（使命）と向き合って生きるのか（新しく生まれる）にあり、たとえ迷っても見つけ出すまで捜し回って下さる主がおられる（ルカ福音書 15 章４節）ことを心に留め、他者への評価ではなく自身の歩みを誠実に進めたい。